

LIBRARY INFORMATION



1862年の徳川幕府遣欧使節に関して……………人文地理学教授 君塚 進 ……………2
 —外大図書館発展史— 終章……………事務長 松村 俊一 ……………4
 國澤慶一先生と本の思い出……………イスペイン語学科教授 森本 久夫 ……………6
 An Original & Reprint Book Collection on Japanology. (日本関係研究コレクション) ……………7
 ブラジル独立100周年記念出版「ポルトガルによるブラジル殖民の歴史」について
 ポルトガル・ブラジル語学科助教授 有水 博 ……………11

大阪外国語大学附属図書館 1989.3.27

FORMATION

第5号

1862年の徳川幕府遣欧使節に関して

人文地理学 教授 君塚 進

旅具の贅品(不必要品)

鎗(やり) 具足(よろいなど) 馬具 銃炮(ほう)
 火事具 陣笠 腰差挑燈 大夜
 着 布団 小夜着(かいくるみ)の類ハ要用なり
 蓑(みの) 傘 下駄 雪踏(せつた) 長合羽
 桐油(とうゆ) わらじ 蚊帳(かや) 挑燈類
 蠟燭(ろうそく) 袖炉 弁当箱 銅盤(かなだらい)
 折のし水引 食料用意品 是ハ面々
 取捨あるへし 膳具類 膳箱五器等をいふ
 ()内およびルビ筆者。以下同じ。

〔註〕 腰差挑燈 鯨のひげを材に、つり竿式に伸縮する柄を腰にさすようにしたちようちん。懐中電燈の如き用。

夜着 厚いかいまき。かいくるみ 皆ぐるみ。かいまきと同じ。

桐油 油紙用。袖炉 かいろ。

食料用意品 例えば梅干・塩昆布といったもの。

五器 食物をいれるふた付の椀。(付)ごきかぶり→ごきぶり。

わらじ 軍学者の指示により、茗荷(みよが)の茎を編み、千足分を用意した。結局棄てている。

必備

小鉄槌(ハンマー) 小鋸(のこぎり) 釘抜
 釘鋸 是ハ意外の用ニ適ふ

彼方(西洋人)嗜好(このむ)の品類

太刀拵(たしろう)付并(ならびに)白鞘(しろが) 短刀(たんとう)同断
 紅白(こうはく)其外(そのほか)紋縮緬(もんしゆくめん)絞(しぼ)りの類 純(じゆん)緞(だん)の誤(ご)字
 子漆(しゆす)繻(す)子(す)并(ならびに)厚板(あついた)小柳(こやなぎ)等(とう)女帯(にょたい)地の類 色海(いろか)気(き)(甲斐(かい)斐(ひ)絹(ぬい)のこと) 銅陶(どうとう)置物(ちぶつ)類 但(たゞ)人物(にんぶつ)を尚(たう)ぶ。器陶(きとう)器(き)大花(おほなはな) 瓶類(びんるい) 蒔絵(まきゑ)香箱(かうしやう)文箱(ぶんしやう)の類 青貝(あおが)ぬり 鞭(むち) (らでんのステッキ)
 骨角(こつかく)精好(しやうこう)細工(さいこう)根付(ねつけ)ケ類 玩物(がんぶつ)毛植(けうち)鳥獸(ちゆうじゆ)の類 同鎗(どうしやう)大小(おほいせ)刀(た)の類 小人形(こじんがた) 着類(ちやうるい)とも揃(そろ) 烟竿(えんかん)(きせる) 七度(しちど)やきを尚(たう)ぶ

同筒烟袋(どうしやう) 扇(あふ) 女扇(にょせん)の方(かた)を尚(たう)ぶ 錦絵類(にしんゑるい)
 絵草子(ゑくさし) 草ぞふし 額面(がくめん)の類 人物(にんぶつ)を尚(たう)ぶ
 竹細工(たけさいこう)下ケ(したけ)もの類 同花瓶(どうけぼん) 御国(ごくに)(日本)
 製巻(せいまい)烟草(たばこ)入(いれ) 麦(むぎ)わら細工(さいこう)小箱(せうしやう)類 水晶玉(すいしゆい)
 細工物(さいこうぶつ) 千代紙(ちよがみ) 投品(ていひん)(プレゼント)の包紙(たむけがみ)ニ用(もち)て
 彼も喜(こ)び我(われ)も便(べん)なり

〔註〕 根付 たばこ入・いんろうなどを帯に狭む際、落ちぬように付けた紐の端に付する小形の細工品。

玩物 おもちや。

七度やき 何回も焼きつけた上等のめつき。

草子 双紙。

卒然(そつぜん)といろいろ並記したが、これらは組頭柴田剛中(さいだんこうちゆう)の日記にメモされているものである。

彼は、若年、評定所勤務以来、外国関係の部門で勤務し、外国奉行所新設の当初から組頭となって、神奈川(横浜)開港に際しては、地所の見分から奔走した。この遣欧使節行では、随員首席として、人員の選考から、年余にわたる長期出張の準備万端を統括した。実際の外交交渉には使節等と同席し、またしばしば“微恙”を發した使節の代理をつとめている。その旅中日記は三冊に纏められ、細字毛筆でギッシリ記されているが、その第1冊末尾あたりに、上記のリストがある。それは恰度(かたど)仏・英を経て、オランダに渡り国王謁見を済ませた時点に当る。

(1862年7月1日)当時既に修好通商(航海)条約を締結していた欧州6か国のうち3国目の時で、それぞれの国に、將軍家茂からの贈り物をはじめ、公私いろいろのプレゼントのことがあった訳だが、それらや持参品への反省・評価といったものである。

この使節行は訪問国側の招待の形で、宿泊・移動等すべて先方側に依り、それは万延のアメリカ行に対しての処遇である。その先例がありながら、「贅品」を持参したというところに自尊

自大とか、認識の貧困とか、また実体験からの反省が見てとれよう。[なお必備・彼方嗜好の品類リストとも併せて、今日にも参考になることが多い。] 大名の格式をとる国内出張が基準であったが、携行した三州味噌はインド洋に投棄し、莫大な米はパリでの宿舎オテル・デュ・ルーブルに与えてもいる。1864年に第2回の遣欧使節池田筑後守一行が出るが、この時にも副使河津伊豆守が甲冑に身を固めて観兵式に出、落馬するようなことがあった。池田には“七三にわたしたへア・スタイル”の写像がある。これは62年使節団が5月23日に、英国Aldershotで観兵の時の体験と関連があるかもしれない。柴田は、「本日寒風陣々郊原茫々の地、拳肌粟を生し防寒ニノミ思を屈して、調練の進退を熟視するあたはず。……(中略)……強て車中ニ危坐すれども覚へず身を潜メ、手を袖ニし、笠を傾て沙風を避く思を起して危坐するといへとも一瞬間ニしてまた防寒の為めに体を潜めり。如斯する数次、遂ニ全隊を見得ずして卒れり。阿々。」と記している。なお池田使節団に関しては、昨年「スフィンクスと34人のサムライ」のテレビ放映があり、出版もなされた。

些事をとり上げたが、これらは観点をかえて考えねばならない。なにしろ外国奉行所新設が1858年8月といういわば黎明期に、“万里絶域”の“開化最盛”の諸国へ使することとて、外国事情にも外交常識にもあまりにも乏しかったこと、そして2世紀半の鎖国に、朱子学的素養のインテリ達、産業革命急進中の環境に身を置く訳で、彼我の懸隔の甚しきは想像に余りある。緊張と不安、錯覚と当惑、しかも自負と気負いと知的貪欲さの^な縋いませに、通じて見てとれるのは自主対等を、古い言葉だが「御国のために」を常に持して、生真面目に努めていったことである。

4月13日、パリにおいてナポレオン3世謁見が行われたが、一行はそれが済む迄殆ど外出らしい外出もせず謹んでいた。ユーラシアのさい果てからの日本人達がなかなか公衆の面前に出ぬことは、いたく僂民衆のエキゾチシズムを刺激し、獵奇的な関心もあった。ボードレルは又聞きにより、「日本人は猿」と記してもいる。パリジャン達の好奇心、憶測は甚しかった。謁見の際にも「…侍女は眼鏡等取出して使節等を

望見し、互ニ^{なん}噂々密語、さらニ礼典を行ふ席の^{ごとく}如ならず…」の態であった。実は少し以前にシャム王国よりの使節が来ており、その印象とはかけ離れて、ごく地味な鳥帽子狩衣や羽織袴といった、伝統的礼装の出現が、一種の失望感を与えたようである。しかしこの第一印象が次第に変化してゆく。フランス人は、「彼等には黒が最も似合う」ことに気がついてゆき、日本人の持つ美的感覚や見識の高さを^{うま}頷いてゆく。珍奇な見ものへの期待が裏切られて、却って「古い東洋がヨーロッパと同じ高みにある」ことを発見するのであった。1865年に柴田は理事官として再度仏・英に使用するが、この両度に随員に選んだ福地源一郎(桜痴)の著「懷往事談」に柴田を回顧して、服装につき「守る所を守り、殊俗異風の嘲嗤は恥辱に非ず、風俗は国家の憲章を以てするに非ざるよりは妄りに^し変ずべからずと云ひ、己れも守り随行員にも守らせる」文化的伝統への誇りと認識に感服している。

とはいえ実体験からして、合理主義的精神への理解と適応はまた、行程の進むに従いさまざまのものがあつたことは、数々の資料・文書に知られる。全く稚い、がしかし貪欲なまでに積極性にあふれていた一行であった。その風は今日にも連なるのではなからうか。話はとぶが、今日のわが国の交通の現況と、つぎの柴田の記を対比して戴きたい。

2月4日香港にて総督府差廻しの馬車に乗ったが、「一輛は石能兩州(副使、監察使)一輛は余と源三(太田源三郎。通詞)を乗らしむ。余いた車に登りし事なく、如何すへき哉問んと欲するニ源三の外人なし。護卒衛士列居嚴肅の地、体裁を失するハ老人の耻ニあらずと思ひ量りて、傲然、車ニ登りて座をトしかとも後また如何ともするを知らず。胸中困却の折柄…(中略)…心中初而安キを得たり。」

スエズ上陸の際はじめて鉄道に乗るが、随員の1人はレール1本の幅・高さ・長さを物指で計測したりしている。

先年、日米修好百年を機に、万延遣米使節行は詳細にわたり行跡が明らかにされたが、当時の幕府内部では、アメリカを先進地域中の“新開地”的に認識していた。これについての初の遣欧使節団として38名(出発時36名)で構成された

が、正使竹内下野守と副・監察使のほか、米行経験者6名(いずれも随員)を含めて若手俊秀のエリート達である。維新の変革を挟み、かつまたその後の国政の動向からも、さらに史料焼失のこともあって、この行の行動と実績には、空白ないし偏曲の部分が多いが、文化史的観点からは実に大きな影響を明治期に及ぼしている。昨秋の石浜文庫記念講演会に紹介したが、この使節行の概要と、比較文化史的視野に重点を置いての論が、芳賀徹著「大君の使節 幕末日本人の西欧体験」(中公新書)に展開されている。同氏の才気煥発の記述は、本学の特長からも、大いに参考になると考えるし、この稿にも屢々借用させて戴いた。

この遣欧使節団に付与された使命は、柴田の「談判件々抄」(筆記は添削もなく整頓されている)に30項目が知られる。ふつう両都(江戸・大坂)両港(兵庫・新潟)開市開港延期交渉(5か年。英公使オールコックは「唯一の大目的、すなわち開港延期」と強調している。「大君の都。」(岩波文庫))と、北蝦夷地(カラフト)境界決定の対ロシア交渉とされるが、それらはオールコックのいう「道理を

わきまえた政府なら、提案などしそくない」件々と同列に、漸く第10番目・27番目に記されている。

これに対し調査研究を行うものは18項目あり、軍艦購入の件の外、「各国政事学政軍制は別して心懸取調可申事」と強調されている。

通観すれば、いわゆる reconnaissance journey (偵察旅行)に重点があったと考えられ、これに福沢諭吉、(中津藩士)、箕作秋坪(津山藩士)、松木弘安(のちの寺島宗則。薩摩藩士)、杉徳輔(長州藩士)等の諸藩士エリートが加わっていた訳である。幕吏福田作太郎(勘定格徒目付として随行。)が諸調査報告を集めて編纂したと思われる6か国「探索」の筆録(東大史料編纂所蔵)があり、うち「英国探索」は松沢弘陽氏が校注並びに解説されている。(西洋見聞集所載。——日本思想大系66——岩波書店刊)(なお同書に沼田次郎氏、および筆者もこの使節行に関し、若干の解説を付した。)

いずれにせよ我国外交の曙の頃の事情のほんの一端を紹介した。当時そして以降の内外諸般のあれこれと思ひ合せて頂ければ。

一 外大図書館発展史 — 終章

事務長 松村俊一

去る2月23日の教授会において、永年に亘る図書館の懸案事項であった図書委員会改組が承認されたことは、外大図書館発展史上、大きな転換を迎えたといっても過言ではなからう…。

改組に当たって、かなり見解に差異があったことは、言うまでもない。それは、図書館の活動が全学的な意志の反映がなければならぬからで、そのための機構の改組とあって、注目をあびることになるのは、必然である。

本学の各種委員会は、教授会常置委員会として、第1種・第2種更に特別委員会に区分されているが、図書委員会は、上記第1種に所属していた。従って、教授会で選出された委員から正・副委員長をとりきめ、同委員長主宰のもとに運営がなされていたのである。つまり、いいかえれば教授会常置委員会が、図書館の運営に

携わっていたともいえる。

しかも委員会には、図書館長が委員でなく、単に列席者にすぎなかったもので、そこで、委員会と館長の職務権限との間に矛盾が生じてくる。

もともと、教育公務員特例法及び同法施行令においては、図書館長を「部局長」とし、その選考手続きを定めてはいるものの、職務権限について明文の規程を欠いている面がある。しかし、当然にその部局の業務を掌り、所属職員を監督するものであると解されるのが通常なので図書館の統率者が、図書委員会において、図書館運営について発言力のない単なるオブザーバーとあらば、誠に奇異なことである。

かろうじて、このたび館長主宰の委員長が成立したことは、大きな前進と言ってよい。全国各国立大学の図書委員会規程を照合しても、ほ

とんどもが共通しており、本学のような例は、希であったのである。

このたびの改組は、もう少し具体的に言うならば、現行の「図書委員会」を改組し、本学のいわゆる第2種委員会または、特別委員会的なかたち、即ち図書館長をもって委員長とする、「図書館委員会」という名称に改ったこと、構成メンバーに「学生部長・第二部主事」が加えられたこと、審議内容は、「図書館に関する重要事項について審議する」と抽象的な表現で規程しているので、「①収書・選書②図書館規則の改廃③学術情報の利用④その他」と具体的内容を明示し、教授会の記録にとどめることになったことである。

また、前号にも觸れたが、あらたに、「学術出版委員会」(第一種委員会)が設置され、従来の図書委員会の業務であった学報関係が、同委員会で執りおこなうこととなったことである。

平成元年4月より、新しく上述の二つの委員会がそれぞれ発足することになったのであるが、いずれにせよ、改組に当っては、現池田廉館長のご尽力、並びに現図書委員会教官諸氏のご理解によって成立をみたと言えよう。

このことは、図書館にとっては、大きな転換となったが、しかしながら、それだけに、今後図書館職員の責務は、更に重大になったとも言えるのである。

館員は、館長を補佐し、各委員の貴重なご意見

に基づいて、今後の図書館の発展、即ち大学の発展を、積極的に促していかなばならない。

大学移転から10年、本学図書館の今後の課題として、未解決事項がまだまだ山積している。これからは、館長のもと、各委員並びに館員によって逐次解消されていくであろう……………。

因みに、それらの事項を列挙すると。

I. 電算化関係

- 1) 電算機の更新
- 2) 学術情報システムへの積極的対応
- 3) 電子情報の取り入れ

II. 学術情報

- 1) 係長の設置
- 2) 定員の確保
- 3) 文献複写・相互利用の充実

III. 貴重図書室関係

- 1) 石浜文庫の整理
- 2) 従前から保有している貴重本の整理
- 3) 貴重図書室の整備及び展示ケースの活用
- 4) 貴重本のマイクロフィルム化

IV. 地図コーナー関係

- 1) 地図の収集および活用

V. 図書館資格面積の関係

- 1) 図書収蔵についての対策等が挙げられている……………。

外大図書館発展史序章から、3回にわたって概ねであるが、近代図書館として、視聴覚関係をも含め、発展の経緯を粗雑ながら、綴ったつ



昭和29年4月24日 上本町学舎附属図書館(昭和28年度竣工)が落成し、同閲覧室において披露パーティーが行われた。

もりである。

ここで、附記しておきたいことは、序章に帰するが、図書館とは、共同利用のサービス機関であり、従って最も高い理想として、単純な表現ではあるが、一度入館すれば、「この図書館という空間に、いつまでも居続けたい……。」と利用者にそう思わせるような、そのような図書館でなければならないと、私は念願するのである。

移転、業務電算化、委員会改組は、本学図書

館発展史上大きなポイントとなっていることはいなむことはできないだろう。これらについては、全館員の努力の結実であることは申すまでもないが、末筆に当って、執筆者として、特に記録にとどめておきたいことは、以上述べてきた、本学図書館発展の原動力となった岸本晴広専門員、前青山弘専門員（現山口大学情報サービス課長）の両氏の積極的な努力と英知によるものであったことをつけ加え、この機会をかりて、心から賞賛と敬意を表しておきたい。

國澤慶一先生と本の思い出

イスパニア語学科教授 森本久夫

國澤慶一先生は昨年(1988)4月逝去された。私の記憶に誤りがなければ、86歳になられたところだった。静かな最後であった。

先生は佐藤久平先生の後をうけて二代目のイスパニア語学科主任になられ、1968年停年退官されるまでその地位にありながら全学の学生の就職を担当された。1958年春、私はイスパニア語学科に入学したが、その頃の先生は丁度現在の吉田秀太郎先生の年令と私の年令の間位におられたのではないかと思う。

教室での先生は厳しかった。指名された以上は、正しかろうと間違っておろうととにかく返答するまで解放されなかった。返事しないといつまでも待っておられた。その沈黙が重くのしかかり苦しかった。だから教室外で先生の処へ行くのは恐わかった。ある時、テキストに使う *Principios de español*, Harrap を研究室へ購入に行った。ロンドンから取り寄せられたその本の代金は私の財布の中味を超えていた。先生は私が払えるだけでいいと言われた。これがきっかけになって先生と話せるようになった。

語学教師としての先生は「スペイン語基礎1500語」(大学書林)、「第一西語語読本」(大学書林)、「イスパニア語の初歩」(白水社)、「初級スペイン語読本」(大学書林)、「図解スペイン語会話」(海運堂)、「図解ポルトガル語会話」(海運堂)等を著わされた。最後の本では私は校正を手伝

ったが、そのためにポルトガル語文法をアルファベットから復習しなければならなかった。

私が助手として研究室にのこってからのこと『ドン・キホーテ』が欲しくて、どの版がいいか先生に相談すると、私も一つ買うので同じものでいいかと言われた。結構ですと返事したら数カ月して本がとどいた。Ediciones Castilla, Madridの緑の皮表紙の豪華版でドレの挿絵があちこちに載っていて楽しかった。今もそれをひもとく度に先生を思い出す。

先生は専攻のイスパニアだけでなく、ポルトガルとその言語にも関心が強く、老年になってからもその情熱を失われることなく、半年間という予定を1年間にのぼし、リスボンで若者たちにまじってポルトガル語の研修に励まれたことがある。そうした旅の土産にと『ウズ・ルジアダス』を下さった。こうした先生の影響だろうか。私も旅の土産に恩師や同学の友人には書物を選ぶことが多い。自分の好みで選ぶというより、受けとられる人に役立ちそうなものを選ぶ。

先生は停年退官されると枚方に新居を建てられたが、次の職場である京都産大に勤められる間は京都のマンションに起居された。産大を退かれてからは枚方で、教会での礼拝とロータリーの会合に出るのが楽しみという生活をされていた。

最後まで愛妻家であった先生は、先に逝かれた夫人を想って、充分に大事にしてやれなかったと洩して涙を流された。今思うに、かけがない人生の伴侶を失くされたのが先生の老いを早めたような気がする。タバコも喫わず酒も飲まれなかった先生は、どこ一つ悪い処はないと医者に言われていると自慢されていたが、ある日病院からだと私に電話をよこされた。その病院の窓から私の住んでいた公務員宿舎が見えたので急に会いたくなつたと言われた。わが子に恵まれなかった先生が人恋しくなられたのも老いのなせることだったのであるだろうか。その時は病気といえるものではなく検査が済むと退院され、家が近い吉田先生宅を訪ねるのを習慣にされていた。

お家に先生をお訪ねした幾度目かのとき、今何を一番勉強しているのかときかれるので、自分の頭の中にイスパニア美術を組み立てたいと思っておりますと答えた。そしたら書棚から1冊

の本を取り出され、持って帰れと言われた。

René Schwob: Profondeurs de l'Espagne, grasset, Paris という仏訳本であった。ポルトガル語同様フランス語も自由に読みこなされた先生は私にも気軽に読めとおっしゃる。私は少々閉口した。しかし私は結局その本を持ち帰った。

先生は数年前から急に脚に自信を失くされた。会長をつとめられていた日本イスパニア学会に出席されるのに吉田先生と私は運転手の役目をおおせつかるようになった。それでもまだお元気だった。

だのに、枚方にある長尾病院に入られてから急に衰えが目立ちはじめた。言葉がよく解らなくなつて人恋しさが激しくなった。急性肺炎がそんな先生から最後の意識を奪った。

Schwob の訳本がついに持ち主に帰らず、私の手の中に残ってしまった。(1989.3.3)

日本関係研究コレクション(そのII)

(An Original & Reprint Book Collection on Japanology)

- 291.03/14 Japanese geography
- 302. 1/122 Inside Japan : welth, work and power in the new Japanese empire
- 302. 1/134 Russian studies of Japan : an exploratory survey
- 302. 2/67 The Challenge of China and Japan : politics and development in East Asia
- 302.55/33 Latin American monograph series
- 310. 3/38 Japanese political science
- 312. 1/83 The Government of Japan
- 312. 1/85 Japan and Korea : America's allies in the Pacific
- 312. 1/86 Government in Japan : recent trends in its scope and operation
- 312. 1/87 The New Japan : government and politics
- 312. 1/88 Destiny in the Pacific
- 312. 1/89 A Case study of Japan's bureaucracy
- 312. 1/90 Japan's emerging role as an Asian-Pacific power
- 312. 1/91 The Future of Japanese nationalism
- 312. 1/92 Political leadership in contemporary Japan
- 314 /58 Parties, Candidates, and voters in Japan : Six quantative studies
- 315. 1/18 Red flag in Japan : international communism in action 1919-1951
- 316.82/1 Nationalism and the crises of ethnic minorities in Asia
- 319. 1/143 Japan and the United States : challenges and opportunities
- 319. 1/145 Japan between East and West
- 319. 1/147 The Japanese people and foreign policy

319. 1/148 Control of Japanese foreign policy
319. 1/149 Foreign policy of Japan : 1914-1939
319. 1/150 The Secret memories of Count Tadasu Hayashi G. C. V. O
319. 1/151 The Soviet seizure of the Kuriles
319. 2/72 American Far Eastern policy and the Sino-Japanese War
319. 2/73 Propaganda from China and Japan
319. 22/133 China and Japan-emerging global powers
319. 51/4 Neighbors across the Pacific
319. 53/248 The Political process and foreign policy
319. 53/249 He opened the door of Japan
319. 53/250 Peace-making and the settlement with Japan
319. 53/251 America's Far Eastern policy
319. 53/253 United States-Japanese political relations
319. 53/254 U. S. policy toward Japan and Korea
322. 1/18 The Justice of the Western consular courts in 19th century Japan
- 325 /110 Japanese business law and the legal system
329. 2/37 Japan and the United Nations
330. 3/86 The Economic conditions of East and Southeast Asia
330. 3/88 Japanese economics : a guide to Japanese reference and research materials
331. 5/46 Transfer pricing practices in the United States and Japan
332. 1/121 Japan's economic recovery
332. 1/122 A Short economic history of modern Japan
332. 1/123 Japan's economic policy
332. 1/124 Japan and world depression : then and now
332. 1/125 The Economic development of Japan c. 1868-1941
332. 1/126 The Economic development of Japan : a quantitative study
332. 1/127 The Contemporary Japanese economy
332. 1/128 Industrial Japan : aspects of recent economic changes as viewed by Japanese writers
332. 1/129 The Penetration of money economy in Japan and its effects upon social and political institutions
332. 1/130 The Competition : dealing with Japan
332. 1/131 Business and society in Japan : fundamentals for businessmen
333. 8/152 Japan's commercial empire
333. 8/153 Japanese technology transfer to Brazil
333. 8/154 Japan's role in Soviet economic growth
334. 3/52 The Growth of population and occupational changes in Japan, 1920-1935
334. 4/9 The Japanese frontier in Hawaii, 1868-1898
334. 4/80 Hawaiian Americans
334. 4/83 The Japanese American community
- 335 /349 Paternalism in the Japanese economy
- 335 /351 Japanese management : cultural and environmental considerations
- 335 /352 Japanese-U. S. business negotiations : a cross-cultural study
335. 4/65 Japanese multinationals in the United States : case studies
335. 9/141 Corporate communications
338. 9/109 Japanese direct manufacturing investment in the United States
361. 44/49 Japanese and Americans : a century of cultural relations
361. 6/101 Images of Japanese society
366. 2/34 United States-Japan comparative study of employment adjustment

366. 61/38 A History of labor in modern Japan
366. 61/39 Culture in Japanese labor relation
366. 9/32 Willing workers : the works ethics in Japan, England, and the United States
367. 2/23 Korean and Japanese women : an analytic bibliographical guide
367. 21/46 The Broader Way : a woman's life in the new Japan
367. 3/72 Changing values of the Japanese family
372. 1/80 The Japanese school : lessons for industrial America
372. 1/81 Report of the United States Education Mission to Japan
372. 1/82 Adaptation and education in Japan
372. 53/31 Educational policies in crisis : Japanese and American perspectives
382. 1/96 Japanese popular culture
382. 1/98 Glimpses of unfamiliar Japan ; Vol. 1-2
382. 1/99 The Japanese : how they live and work
382. 1/100 The After hours : modern Japan and the search for enjoyment
- 384 /53 Home life in Tokyo
388. 9/152 Japanese peasant songs
389. 1/25 Ainu, creed and cult
390. 1/4 Japanese policy and East Asian security
392. 1/75 The Military side of Japanese life
392. 1/76 Japan's military masters : the army in Japanese life
- 393 /142 The Anatomy of a small war
- 397 /11 The End of the Japanese navy : 聯合艦隊
- 403 /110 Japanese scientific and technical literature : a subject guide
490. 2/54 Japanese medicine
- 491 /139 Processes in cutaneous epidermal differentiation
- 509 /55 Mechatronics : developments in Japan and Europe
- 509 /56 Trading technology : Europe and Japan in the Middle East
- 539 /30 The Japanese auto industry and the U.S. market
- 539 /31 Entrepreneurship in a "Mature Industry"
- 539 /32 Automobiles and the future
- 539 /33 The American automobile industry : rebirth or requiem ?
- 539 /34 The Japanese automobile industry
- 539 /35 Industry at the crossroads
612. 1/45 Collective decision making in rural Japan
670. 9/83 Japanese business language : an essential dictionary
- 675 /74 Japan's market : the distribution system
678. 1/14 Japanese trade policy formulation
678. 21/11 The Foreign commerce of Japan since the restoration 1869-1900
678. 21/12 Trade problems between Japan and Western Europe
678. 21/13 Postwar developments in Japan's foreign trade
678. 25/12 U.S. trade problems in steel : Japan, West Germany, & Italy
678. 25/13 Oil prices and trade deficits : U.S. conflicts with Japan and West Germany
- 690 /22 The Information explosion : the new electronic media in Japan and Europe
- 721 /65 The Drawings of Hokusai
- 728 /61 Zen and the art of calligraphy : the essence of Sho
- 749 /9 The History and practice of Japanese printmaking.
- 756 /2 The Manufacture of armour and helmets in sixteenth century Japan
- 756 /14 The Sword book in Honcho gunkiko and The book of same, Ko hi sei gi of Inaba Tsurio

- 756 /15 Shosankenshu=日本金工史 小杉軒集 : list of names, Kakihan
 756 /18 Japanese sword fittings : a descriptive catalogue of the collection of G.H.Naunton
 768 /1 Nagauta : the heart of Kabuki music
 768 /10 Tegotomono : music for the Japanese Koto
 772. 1/13 Three Japanese plays from the traditional theater
 773 /10 Early No drama : its background, character and development 1300-1450
 774 /29 Kabuki encyclopedia : an English-language adaptation of Kabuki Jiten
 774 /31 Sukeroku's double identity : the dramatic structure of Edo kabuki
 789 /25 Zen in the art of archery
 789 /26 Japanese polearms
 793 /8 Zen in the art of flower arrangement
 807 /225 A Preliminary inquiry into the successful & unsuccessful listening strategies
 910. 26/80 Writers and society in modern Japan
 911. 5/83 Treelike : the poetry of Kinoshita Yuji
 911. 5/85 The Poetry of living Japan
 913. 4/22 Tales of the Samurai
 913. 4/23 The Taiheiki : a chronicle of medieval Japan
 913. 6/95 Hell screen ("Jigoku hen") and other stories
 913. 6/505 Reality and fiction in modern Japanese literature
 913. 6/509 Japan's first modern novel : Ukigumo of Futabatei Shimei

ブラジル独立100周年記念出版 「ポルトガルによるブラジル殖民の歴史」について

ポルトガル・ブラジル語学科 助教授 有水 博

ブラジルは、1822年ポルトガルより独立したが、その100周年にあたる1922年から1926年にかけて標題の豪華本3巻(37.5cm×28cm、276～462頁)が記念出版された。出版の契機は、ブラジル各地に所在するポルトガル人会が発起人となり、ポルトガル本国政府の補助を受けて、当時のポルトガルの著名な文学者で、歴史小説も書いていたCarlos Malheiro Diasや、Jaime Cortezãoに執筆を依頼したものである。この本は多くの図版、地図、さし絵等を集大成しているが、この中から後にポルトガルやブラジルの教科書の多くが、さし絵等を転載している。文学者が書いたものではあるが、当時の歴史小説は自然主義の影響を受け、努めて客観的に歴史叙述が行なわれた。当時の歴史家の学説の成果も取り入れて書かれている。

本学の図書館に所蔵されている本書の見開き

の余白には、当時のポルトガルの文部大臣が、300冊を買上げ、世界の諸大学に贈呈したもののうちの一冊であり、大阪外国語学校に献呈するとのポルトガル語の書き込みがある。本学のポルトガル・ブラジル語学科は、新設学科とはいえ、今年でちょうど満10年を迎えたので、これを機会に同書のさし絵のうち、色彩の豊かなものを、二～三紹介したい。

本号表紙の絵(同書第二巻1頁)、真中にブラジル発見者—艦隊司令官ペドロ・アルヴァレス・カブラールの肖像周囲に同艦隊の各艦船の司揮官の紋章、の解説

この図の真中の人物は、1500年4月22日、インドへ赴く途中ブラジルを発見した艦隊の総司令官Pedro Alvares Cabralである。今日、歴

史家の多数説は、当時ポルトガル王室は、今日のブラジルの地点に陸地があるのを既に知っており、カブラール艦隊は、それを公式化したに過ぎないとしている。カブラールは、1467年内至1468年に生れたとされているので、1500年当時は未だ32～3才の若さで、13隻の大艦隊の総司令官に抜てきされた訳であるが、それ以前の功績については明らかではない。ただカブラール家は、ペドロ・アルヴァレス・カブラールの四代前から貴族に叙せられており、発見航海時代を切り開いたヘンリー航海王子、ドン・ジョアオン二世に曾祖父や祖父が仕える等王室と密接な関係にあり、祖母、母方には著名な海軍提督や豊かな領地を相続した領主の娘がいる。

この図は、真中のカブラールの肖像を取り囲むように、カブラール艦隊の各艦船の指揮官の家の紋章が配置されている。カブラールの真上の赤色の盾はポルトガル王室の紋章、真下の山羊の紋章はカブラール家のものである、右上隅から時計まわりに、アイレス・ゴメス・ダ・シルヴァ（指揮官の中で最も家柄が高い）、ヌーノ・レイタオン・ダ・クニーニャ、サンショ・デ・トヴァール（副総司令官）、ニコラウ・デ・コエーリヨ（右下隅、1497年ヴァスコ・ダ・ガマの艦隊の一艦船の指揮官としてインドに初渡来）シマオン・デ・ミランダ（左下隅、貴族）、バルトロメウ・ディーアス（左下から二番目のマリ）の図柄があるもの。希望岬を回り、ヴァスコ・ダ・ガマのインドへの道を切り開いた航海者、ガマのインド行きの船の建造を指揮し、途中まで伴走した。出自不明）、ガスパル・デ・レモス、ヴァスコ・ダ・アタイデ各家の紋章である。

次頁左下（同書第二巻54～55頁の間）の帆船のスケッチの解説

1497年ヴァスコ・ダ・ガマの艦隊が初めてインドに到達した時は、わずか3隻の、みすぼらしい艦隊だったため、ポルトガルの東洋との直接の交易を妨害しようとしたイスラムの中傷に合い最後には海賊船とみなされた。そこでポル

トガル王室は、イスラムを威圧し、インド西海岸の各地の首長と外交・通商関係を樹立しようとして、計1500人の戦闘員と重火器で武装した13隻の艦隊をインドに派遣した。この艦隊がカブラール艦隊で、インドへの往路の途中、10日間ブラジル沿岸に立ち寄り、ブラジル（発見時はヴェラ・クルース島と命名）発見を公式化した訳である。

ブラジル発見を王室に報告するため、12隻、（13隻のうち1隻はブラジル到達以前に行え不明）の艦隊のうち、1隻（輸送船）をポルトガルに帰航させたほか、インドへ向う途中、バルトロメウ・ディーアスの指揮する船を含め4隻が嵐で難破、1隻が艦隊とはぐれ、結局インドに到達したのは6隻であった（更にこのうち副司令官のサンショ・デ・トヴァールの指揮する船が、インドからの帰路難破している）。

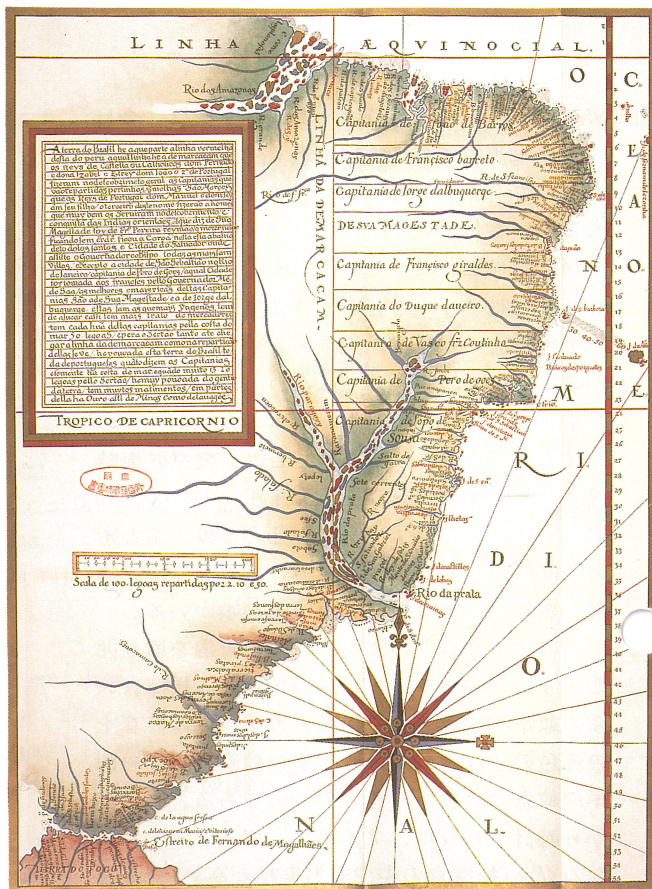
帆船のスケッチを左上から、右左とジグザグに降りてくると、各船の指揮官は、ルイース・ピーレス（難破）、ガスパル・デ・レーモス（一番上の真中、ブラジルの発見を本国に報告のため途中で帰航）、ディオゴ・ディーアス（艦隊とはぐれる）、ペドロ・デ・アタイデ（左二段目、インドに到達）、ヴァスコ・デ・アタイデ（右二段目、ブラジルに到達する以前に行え不明）、ペドロ・アルヴァレス・カブラール（左、上から三段目、総司令官インドに到達）、ニコラウ・コエーリヨ及びヌーノ・レイタオン・ダ・クニーニャ（右、三段目、インドに到達）、シマオン・デ・ミランダ（左、四段目、インドに到達）、アイレス・ゴメス・ダ・シルヴァ（右、五段目、難破）、シマオン・デ・ピーナ（真中、小さい帆船難破）、サンショ・デ・トヴァール（左下、副総司令官、インド到着後、帰路難破）、バルトロメウ・ディーアス（右下、難破）。

次頁右上（同書第三巻256～257頁の間）の地図の解説

ポルトガル王室は、ブラジル発見後、約30年間は、東洋との通商が莫大な利益を上げていたため、そちらに人員と資本をとられ、ブラジル

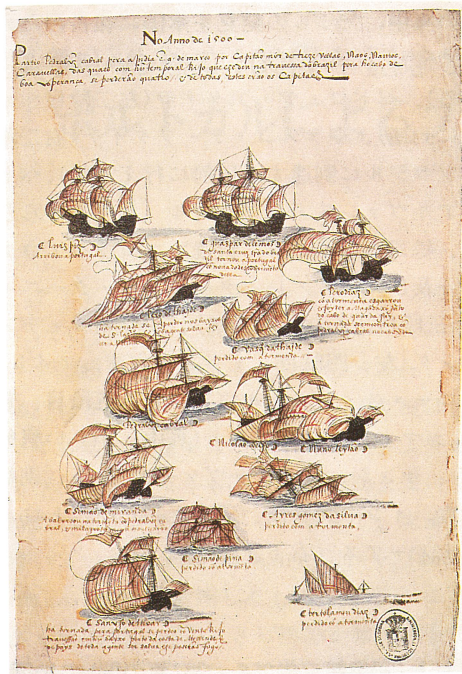
を放置していた。この間フランス人等が、ブラジル沿岸の森林に自生するパウ・ブラジル、(赤い染料がとれる木インドさう)、これがブラジルという国名の由来を盗伐するため、1534年、ポルトガルの中・小貴族にブラジルを分割し、一種の封土として自己資金で開拓をまかせることとした。この制度をカピタニーア制度という。ブラジルの沿岸を15のカピタニーアに分割し、これを12人の中・小貴族(主として、東洋との通商の防衛で功積のあった軍人または王様の取り巻き連)に与えた。この制度は2つのカピタニーアを除くと、インディオの襲撃や資金不足で約20年後には大部分失敗する。

しかし、これらのカピタニーアの開拓の根拠地が、今日のブラジル沿岸各州都のもととなっているのである。



この地図はカピタニーア制度が殆んど失敗し失敗したカピタニーアの後が王領となり、王の代理の総督が派遣(1549年)された後の16世紀末の残存カピタニーアを示した珍しい地図である。

当時の地図は天体観測により緯度は極めて正確に判明していたが、正確な時計がなかったため、経度は不正確で、地図は東西方向にゆがんでいる。中央のラプラタ河が誇大に描かれて居り、ポルトガル王室が、ブラジル内陸部侵入のための水路として、ラ・プラタ河を重視していたことが伺える。真中の縦の赤い線は、ポルトガル王室とスペイン王室が取り決めたトルデシーリャス線であり、中央の水平の赤い線は南回帰線を示す。南米大陸南端のフェゴ島が過大に描かれているのも目を引く(ポルトガル古文書保管所所蔵)。



◆図書館報発行もやっと5号を数えるようになった。今号では、今年度退官される人文地理学の君塚進教授、松村俊一事務長には特に執筆をお願いした。

LIBRARY INFORMATION

— 第 5 号 — 1989年3月27日
 編集発行 大阪外国語大学附属図書館
 印刷 (株)ユニワールド印刷センター